

● 村田 陽 特定助教

Minami MURATA (Assistant Professor)

研究課題：統治する哲学者ソクラテス：哲学的急進派の植民地論と19世紀英国における古代ギリシア受容
(Socrates, the Governing Philosopher: Philosophical Radicals on Colonialism and the Reception of Ancient Greece in Nineteenth-Century Britain)

専門分野：政治思想史 (History of Political Thought)

受入先部局：経済学研究科 (Graduate School of Economics)

前職の機関名：日本学術振興会／京都大学経済学研究科
(JSPS/Graduate School of Economics, Kyoto University)



私の専門は政治思想史で、主にジョン・スチュアート・ミルの民主政論や自由主義の研究に従事してきました。19世紀の英国においてミルは、個人の自由と幸福に関わる幅広い課題に取り組みました。私は、これらの課題が代表制や民主主義、さらに古典古代に源流を有する共和主義といった政治概念に結びつく問いであると考えています。

自眉プロジェクトでは、ミルを含む4名の哲学的急進派の植民地に関する言説を歴史的に分析します。そして、彼らの議論を構成する知的文脈には、古代ギリシアをいかに解釈すべきか、という当時の論争が関わっていたことを明らかにします。そのため、本課題には受容史研究の側面もあります。

「統治する哲学者ソクラテス」とは、本研究の「モチーフ」です。政治から一定の距離を置いた哲学者と理解されてきたソクラテスが、統治を論ずるための様々なメタファーとしても活用された19世紀において、遠い過去である古典古代が現在を問い直すための議論を提供していた可能性を本研究では探究します。

My research specialises in the history of nineteenth-century British political thought, primarily on the democratic theory and liberalism of John Stuart Mill, a philosophical radical. Mill engaged with a wide range of issues concerning individual liberty and happiness. I have been analysing these subjects as questions related to political ideas such as representative government and democracy, as well as republicanism, which has its roots in classical antiquity.

For the Hakubi Project, four philosophical radicals, including Mill, will be investigated through a historical perspective on their discourses on colonialism. It seeks to elucidate that the intellectual context constituting their arguments is related to the debate over how ancient Greece should be interpreted. Consequently, the project is also characterised as reception studies.

“Socrates, the Governing Philosopher” depicts the “motif” of my research topic. In the nineteenth-century, when Socrates, appreciated as a philosopher who kept a certain distance from politics, was also employed as a diverse metaphor for addressing political matters, this study explores the possibilities that classical antiquity, the long-distant past, could have furnished a discourse for rethinking the present.

哲学的急進派とギリシアの繋がり

哲学的急進派（以下、急進派）は、およそ18世紀末から19世紀半ばの英国において、ジェレミー・ベンサム（1748-1832）の功利主義を支持した知識人により形成された集団です（※プロフィール写真の中心は「オート・アイコン」と呼ばれるベンサムの「ミイラ」です）。急進派の多くは、人々の幸福の最大化を目指す功利主義に基づいて、民主主義や自由主義に関わる政治改革論を提示しました。私は彼らのなかでも、特にジョン・スチュアート・ミル（1806-73）とジョージ・グロート

（1794-1871）に着目し、両者の同時代人であるアレクサンダー・ベインによる評価——グロートとミルは「〔古代〕ギリシアに陶醉した人物」であった——の是非を検討しています。

一般的に、古代と近代の政治思想には大きな隔たりがあるといえます。私たちが現在想起する民主主義は、市民が直接的に様々な公共事業に日々参加する古代の民主政とは異なります。また、自由主義それ自体も、宗教改革以降に進展をみせた近代的な思想であると理解されています。ところが、前述の二人の急進派は、

古代ギリシア、特にアテナイの民主政に自由主義的な要素を発見しました。

2000年代以降の先行研究において、ミルやグロートをギリシアから影響を受けた著述家として位置付ける解釈が登場しました（例えばミルを「ソクラテス」の伝統を引き継ぐ思想家として再提起する研究など）。私は、このような見解の知的文脈を再構成すべく、急進派と彼らの論敵である保守派との比較を通じて、19世紀前半の英国では、ギリシアが政治的論争の重要なモチーフであったことを研究しています。

植民地論をめぐるギリシア受容とは？

しかし、ギリシア受容は民主主義などの国内政治をめぐる文脈に限定されていなかった可能性が大いにあり、ここに白眉プロジェクトで本格的に扱う課題があります。つまり、18世紀末から19世紀にかけて、英国で植民地政策を論じる際、古代のギリシアやローマが様々な立場の著述家や政治家に参照されていたことについて、急進派の視点から明らかにすることが、本研究の主たる目的です。

分析対象は、ベンサム、ジェイムズ・ミル（1773-1836）、前述のグロートとジョン・スチュアート・ミルです。ただし、これら4名の思想家を個別に対象とした先行研究には豊かな蓄積があります。他方、ギリシア受容という本研究の分析枠組みをふまえて、彼らの植民地論を再構成し、比較する研究は発展途上にあるといえます。ここに私の研究の着眼点があります。

研究を支える二つの柱： テキストとコンテクスト

本研究の第一の柱は、各急進派の植民地論のテキスト分析です。刊行物のみならず、思想家の研究状況に合わせて、未刊行の草稿の調査も行います。一般的に植民地支配とは、帝国主義にも繋がる強権的な対外統治の営みを内包し、現在に至るまで多くの地域に様々な負荷を与えてきた課題であります。この支配の形態を明らかにするために、政治学、経済学、歴史学、哲学の知見を用いた総合的な検討を試みます。

概して急進派は、当時の英国属領ごとに個別具体的な分析を行い、必ずしも「帝国主義」と単純に一括りにすることのできない視点をも兼ね備えていた側面が

あります。そのため、彼らがインド、アイルランド、オーストラリア、南アフリカといった世界の多様な地域に目を向け、各地域への介入形態や自治・独立の是非を論じていたことを丹念に検討する必要があります。

第二の柱となるギリシア受容については、急進派のみならず、19世紀英国のギリシアやローマに関する文献や政治家たちの言説を参照します。よって、私のこれまでの研究で示された「古代を通じた現在の問い直し」が、国際政治の文脈（コンテクスト）でも活用されていたことの解明を試みます。

ソクラテスをはじめとする哲学者の知や古代における対外支配の歴史が、英国の「空間的外部」に広がる植民地支配にいかなる影響を与えたのか。本研究では、このことを急進派が活動した時期を中心に分析し、当時の植民地論が、英国の「時間的外部」に位置する古典古代を経由していたことを検討します。白眉プロジェクトを通じて、過去に対する理解が、現在と未来に繋がる道筋をいかに形成したのかを考察し、「歴史の現在性」を問い直すことができればと考えています。

参考文献

- Bell, Duncan S. A., "From Ancient to Modern in Victorian Imperial Thought", *The Historical Journal*, Vol. 49, No. 3, 2006, pp. 735-759.
- Demetriou, Kyriakos N. and Antis Loizides (eds.), *John Stuart Mill: A British Socrates*, Palgrave, 2013.
- 村田陽「ギリシアへの陶醉——ジョージ・グロートとジョン・スチュアート・ミルのアテナイの民主政論」『政治思想研究』第23号、2023年、236-267頁。